

参 考

但馬牛の飼料イネ立毛放牧の取組

柏原農業改良普及センター（兵庫県丹波市）

1 ねらい

丹波市では、平成14年から農協が農家と連携しながら飼料イネの栽培に取り組み、現在では、繁殖和牛農家26戸により、10ha栽培されている。しかし、専用収穫機が1台であるため、収穫調製に1ヵ月以上要する等面積拡大のネックになっていた。これまでは、播種時期をずらしたり、成熟期の違う品種を導入して、収穫期間を長くする手法で対応してきたが、気候条件や地域の事情により、これ以上収穫時期を広げることは困難と思われた。そこで、面積拡大に対応する一つの課題解決手法として、立毛放牧技術が有効であると考え、技術実証に取り組んだ。

2 活動の概要

（1）実証ほの概要：実証農家の牛舎に隣接した水田8a（幅20m×長さ40m）に飼料イネ（品種：クサホナミ）を作付した。

入り口から（幅20m×長さ4m）を刈り取り、入牧時の牛の居住スペースとし、残りの立毛部分7.2aで放牧した。放牧頭数は長期不受胎の経産牛2頭、放牧期間は9月25日から11月15日の51日間、ストリップ放牧方式で行った。

放牧の馴致ができていなかったため、放牧初期は配合飼料1kg/日・頭を与えたが1週間で徐々に減らし、その後は給与していない。



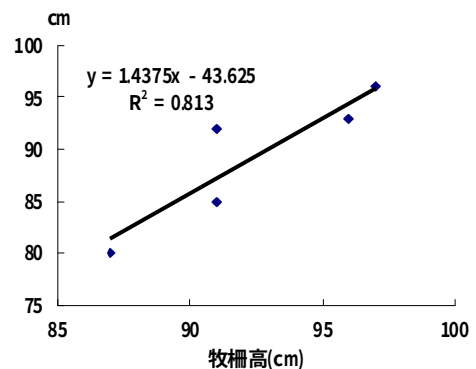
【飼料イネの採食風景】

（2）電気牧柵の移動方法：当初、馴致が不十分であったため、電気牧柵の奥まで採食できなかった。そのため、人の足で稲株を踏んで電気牧柵の前に倒し3日に1回70cm移動した。10日目以降は2日に1回80cm移動した。25日目からは、倒伏による栄養価の低下が懸念されたため、1日1回80cm移動した。

3 活動の成果

飼料イネを利用した立毛放牧の牧養力は高いことがわかった。また、機械収穫では収穫ロスが25%あるのに比べ、立毛放牧では残草量が1%とほとんどロスがなかった。

採食範囲の奥行きの限界は、電牧線の地面からの高さと同比例しており、電気柵の高さで採食範囲をコントロールすることが可能と考えられた。また、放牧も電気牧柵も未経験の牛がストリップ放牧に適応できるようになるまで約2週間かかった。



【牧柵と採食限界（奥行き）の関係】

約2ヵ月間の放牧の結果、若干栄養状態が低下した。しかし、放牧した2頭は長期不受胎であったが、2頭とも発情が見られ、繁殖性の改善が見られた。

立毛放牧に要する1日1頭当たり経費はオペレータによる機械収穫の約45%になり、放牧頭数を増やすことによってさらに経費を削減することが可能と考えられた。

このようなことから、飼料イネの立毛放牧技術は但馬牛でも実施可能であり、稲発酵粗飼料と組み合わせることにより、丹波地域での飼料イネ栽培面積をさらに拡大できる可能性が示された。



【採食後の残株】



【放牧風景】

4 特に効果的であった普及方法等

県立農林水産技術総合センター普及部とプロジェクトチームを組むことにより、効果的な実証ほが実施できた。

放牧研究会や現地研修会での広報により、立毛放牧の状況を関係機関や農家に対して効率よく理解してもらうことができた。

5 残された課題及び今後の方向

今回の技術実証によって立毛放牧の有効性は確認されたが、低コスト、省力化のためにはより放牧頭数を増やして取り組む必要がある。

また、丹波地域で立毛放牧を推進するためには、ほ場の排水性や周辺環境に留意しながら推進することが大切だと考えている。



【排水性の悪い部分が泥濘化する】



【放牧風景】

問い合わせ先
兵庫県農政環境部農林水産局畜産課 草地飼料係
TEL: 078-362-3455 (直)